The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	四庫分類法の歴史
Author(s)	鈴木, 隆一
Citation	懐徳. 1963, 34, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

四庫分類法の歴史

鈴木隆一

一

圖書の貯藏が相當な數量に達すれば、その保存と利用のために目錄の編成は缺くことの出來ない條件となる。圖書目錄は目錄記述と分類の二部分から成立ち、前者は說明に精粗の差はあつても、古來から記述樣式の上では大きな相違はないが、後者は場所により、時代によつて色々な分類法があつたことは歷史の示すところである。もともと圖書の分類法には一定の法則があるわけでなく、要は檢索と利用の便利のために考えられたものであるから、この相違の生ずることも自然の勢いであろう。四庫分類法もその一種であり、專ら中國に於て行われ、發生の古いことと、現在に至るまで猶存續している點に於て世界に比類のない分類法である。この分類法も初めからこの名稱をもつて發足したものでなく、完成までには幾多の變遷を重ねたものであるが、今その經過の跡を概觀してみようと思う。

中國に於て現存する最古の圖書目錄は、後漢の班固の作つた漢書の一篇の藝文志である。藝文志には分類として次の六つの綱目が採用されている。

(1)六藝略　(2)諸子略　(3)詩賦略　(4)兵書略　(5)數術略　(6)方技略

ここで「略」という言葉を用いているが、大略又は概略の意味で、この種類に屬する圖書を網羅したことを示すも

のであつて、分類法では部又は類に相當するものである。この六類の各々の一類は更らに細分類されている。即ち六藝略は九種に分かれ、同様に諸子略は十種、詩賦略は五種、兵書略は四種、數術略は六種、方技略は四種に細分類されている。藝文志はその最後に「六略、三十八種、五九六家、一三・二六九卷」と結んでいる。

ところで班固の藝文志の目錄は彼が始めて作つたものでない。藝文志の序文によると、その先輩に當る劉向・劉歆父子が既に圖書目錄を作つた。劉向の目錄はこれを「別錄」と名付け二十卷あり、劉歆のものは「七略」と名付け七卷あつたと云われるが、二書ともに南宗までに亡びてしまつた。別錄・七略は中國における最初の目錄であるが、この目錄が成立するに至るまでの經過を述べると、先秦以來の圖書は秦の始皇帝の焚書によつて多く失われた。漢の高祖の軍隊が秦の都咸陽に入城する以前に、丞相の蕭何は秦の宮室にあつた「丞相御史の律令・圖書を回收した」（史記卷五十三）。始皇は民間の圖書はこれを取上げ焚いたが、宮中の書庫には大部の圖書を藏していたので、この書が漢の宮中の所有となつたのである。漢の國家の基礎が定まるとともに政治の方針が軍事から文化の充實に重點が置かれるようになり、その爲め一旦亡んだ圖書が再び現われ、或は新しい著述が爲されるようになり、圖書の數量も次第に增加するに至つた。殊に武帝は文武兩道に亘つた大事業を爲し遂げた天子であるが、文敎の面では儒學を以つて國敎と定め、又「藏書の策を建て、書寫の官を置き、下、諸子傳說に及ぶまで皆宮中の祕府に藏した」（藝文志序）。そのため「外は太常・太史・博士の藏あり、內には延閣・廣內・祕室の府あり」（藝文志序）と云うような多くの藏書を見るようになつた。前漢の末葉では宮中の總圖書は三三・〇九〇卷を數えるに至つた。これ等の圖書は適當な管理法を講じなければ亡失の恐れがあり、また檢索にも不便であり、その上色々の系統の書物が雜つていて、その異同を校勘して定本を作らなくては利用も十分でない。このため成帝の河平三年（B. C. 26）に光祿大夫の劉向に詔して宮中の圖書を整理せしめた。向は自ら經傳・諸子・詩賦の三類の書を校勘すると共に、步兵校尉の任宏をして兵書を、太史令の尹咸をして數術の書を整理せしめ、一書の整理が終る每に、その圖書の篇目と內容の大意を卷頭に附して天子に奏

上した。完成間近に劉向は沒したので、その子の劉歆が父の業を繼ぎ、成帝の綏和元年（B. C. 8）に完成した。前後二十年の歳月を費したことになる。各書の卷頭に附した提要だけを別に集めて「別錄」と名付けて單行した。劉歆は別錄の完成に引續き「七略」を作つた。

別錄と七略の相違點は何か。既に述べたように別錄は一册毎にその書の篇目・大意・校勘の結果を記錄したもので、後世の目錄に比較すれば解題目錄か藏書題跋に類したものでないかと思う。これに對して七略は短期間に完成し、且つその卷數が別錄の三分の一であるところから考えると、別錄を本ととしてこれを簡略にしたものでないか。卽ち解題を一書毎でなく、一類毎にまとめて說明するようになつたのであるが、この類別が取りもなおさず分類の謂に外ならぬ。七略の據つた分類は、それを繼承した藝文志の分類法から察すると、當時行われた學術の分類乃至學派の區別を本ととしたように思う。七略はその名の示す通り、全圖書を七類に分類したのである。七略の第一は輯略と云い、この書の概論であつて、目錄の記事そのものでないから、實際の分類綱目は六類に當るわけである。別錄でも何かの分類が採用されたものと思われ、殊に前述の如く夫々專門の學者をして校勘せしめたのであるから、その專門の範圍によつて區別しても自ら分類が生ずるであろう。併し別錄の主眼とするところは圖書の整理と校勘にあり、これに對して七略は圖書を區分する分類に重點が置かれたように思われる。現在の圖書館の整理作業に於ても、先ず圖書の特長を記錄した目錄記述が作られ、次に分類が施されるのが整理の順序である。別錄と七略の關係はこの目錄と分類の整理に相當するものである。整理作業は通例、一人の司書によつて行われるのであるが、これは分類表が既に定めてあるからであつて、劉向父子の場合は、大部の圖書を整理する必要があつたことと、分類表が始めて創設された時期であるから、兩作業が父子二人の間に分擔されたものであろう。されば二書を合併することによつて完全なる分類目錄が生ずることになる。後世では別錄七略と稱し、あだかも一書の如く見做しているのは、父子の合作であるばかりでなく、內容上かような關係を持つからであると思う。

劉向父子によつて整理された大部の宮中の圖書も、前漢の滅亡とともに大部分焚かれた。次いで後漢の時代に入ると、再び圖書の集聚に努力が拂われ、藏書も追々增加するに至つた。後漢の章帝の建初七年（A. D. 82）に班固の漢書が完成したのであるが、その中の一篇の藝文志は前漢時代に存した全圖書の目錄に當り、且つその目錄は六類に分類されたことは前述の通りであるが、この分類法は全く劉歆の七略によつたものである。されば七略の原本は亡んでしまつたが、この藝文志から大體の形を推測することが出來る。

二

別錄七略及び藝文志によつて、圖書目錄の形態が創設されると、これに模して目錄が容易に作りうる。漢が亡び魏が立つに及んで、魏の祕書郎の鄭默が「中經」を作つたと云われるが、その內容は判らない。次いで晉の祕書監の荀勖が鄭默の中經によつて「中經新簿」十四卷を作つた。この新簿の特色は宮中の總圖書を四類の綱目によつて分類したことである。この四部を甲乙丙丁と名付け、甲部は六藝及び小學書。乙部は古代諸子家及び近世諸子家・兵書・兵家・術數の書。丙部は史記・舊事・皇覽簿・雜事、卽ち歷史書。丁部は詩賦・圖讚・汲冢書の圖書を收めたものである（隋書經籍志）。荀勖の四分類を班固の六分類に比較すると、四分類の甲部と丁部は藝文志の六藝略と詩賦略に一致し、異る所は乙部と丙部である。藝文志は歷史書の獨立部門を立てず、司馬遷の史記などは六藝略の中の春秋類の中に入れている。荀勖は歷史部門を新設してこれを丙部と名付けた。次に藝文志では後世、諸子類に總括さるべき圖書を議論書と技術書とに區別し、前者はこれを諸子略に收め、後者は技術の專門別によつて、兵書略・數術略・方技略の三類に分けている。荀勖はこれ等をまとめて乙部に合併したのである。藝文志が歷史部門の獨立を認めなかつたのは、春秋という歷史書が六藝略の中に入つている爲めでもあるが、直接の原因は前漢の時期には未だ歷史の著作が少ないからである。然るに後漢から魏晉にかけて多くの歷史書が現われるようになつた。藝文志では春秋類を二十三家

上げているに過ぎないが、隋書の經籍志では史部に屬する圖書は八百十七部、正史類だけでも六十七部を數える。晉から隋まで、二三百年の距りはあるが、それでも荀勖の頃の事情が推測出來よう。この歴史書の增加が彼をして丙部を獨立せしめた主な原因でないかと思う。又荀勖が藝文志の諸子・兵書・數術・方技の四類を乙部の一類に合併した理由は推測の外はないが、ここに屬する著作は議論と技術との區別があつても、國家社會の政治や道德と直接には關係のない一家言の著作であるというので一類に合併したのではないかと思う。

荀勖はかように藝文志の六分類を改めて四分類を立てたのであるが、目錄學上の功績はこれだけであつて、四部の各類の下に屬する細分類については十分研究していなかつたようである。晉の祕府の圖書も惠帝・懷帝の時の內亂によつて大部分失つてしまつた。東晉の著作郎の李充、宋の祕書監の謝靈運等も四部目錄を作つたが、いずれも荀勖の中經新簿に本づいたものである。次いで宋の王儉は宋の後廢帝の元徽元年（A. D. 473）に「元徽四部書目」四卷を作つた。王儉はこの四部書目の外に劉歆の七略に倣つて「七志」七十卷を作つた。その分類は

(1)經典志　(2)諸子志　(3)文翰志　(4)軍事志　(5)陰陽志　(6)術藝志　(7)圖譜志　道佛附見、合九條

七略は六分類であつたが、これに倣つた七志は七分類であり、增加の部門は地理・地圖の獨立を計り、圖譜志を設けた。又七略の兵書略を軍書志と陰陽志の二部門に分け、反對に合併したものは七略の數術略と方技略を合せて術藝志とした。荀勖によつて獨立した歴史書は再び經典志の中に合併されてしまつた。

王儉が一方では「四部書目」を作り、他方また「七志」を作つたのはどう云うわけであろうか。思うに四部の分類法は荀勖が發明して以來、廣く採用されるに至つたが、それは實用上の便利から考え付いたように思われる。劉向父子の別錄七略の分類の順序というものは學術の發達の順序に從つている。學術の發達は國家社會の全體に關係する學問が先ず生じ、次いで個人の學問・思想が生ずる。六藝略を分類の第一においたのは、そこに收めた圖書が「六經」と云われ、政治道德の基本になるものばかりであるからである。これに較べて諸子略や詩賦略は、いずれも個人の一

家言に過ぎぬから、これを第二、第三においたのである。然るに荀勖が歴史書を獨立せしめるとともに、これを丙部においたのは、史記以下の歴史書が漢代以後の出版物である所から、諸子の乙部の次においたものと思う。されば荀勖の甲乙丙丁の四部は著作の出版の先後によつて區別したものであると云える。この點は七略の排列が學術の本末によつて分類したことと基準を異にするものである。出版の先後によつて分類することは、目錄學から見て意義の少ないものである。李充及び隋志の經籍志以後の目錄では、荀勖の乙丙を入れ換え、乙部は歴史、丙部は諸子類に訂正されるに至つた。荀勖の四部分類はかように便宜的な考えから作られたものであるから、細分類に餘り考慮を拂わなかつた事は既に述べた。ところで細分類は目錄學上重要な意味を持つ。分類の本來の目的である檢索、整理、保管の點から云えば、分類の綱目は少ない方が都合がよい。他方、圖書の種類を正確に區別するには分類綱目は詳しい程よいのであるが、この矛盾を避けるためには大分類を簡單にし、小分類を細分化することによつて解決される。つまり系統的の分類法を採用することである。系統的と云えば、既に述べた如く七略や藝文志もこの分類法を採用しているのであるが、ただここでは分類法に於ける系統の意義を十分理解していたかどうかが疑わしい。六藝略は易・書・詩・禮・樂・春秋等の經書を總括するものであるが、六經の名は既に莊子（天運篇）に見え、諸子略の本をなす諸子百家の語が史記（賈誼傳）に見えていることから考えると、七略及び藝文志の系統的分類法は單に先秦以來の慣用名を襲つたもののように思われる。このことは王儉が荀勖に倣つた四部書目と、七略に倣つた七志を別行せしめたところからも窺われる。卽ち兩分類を合併すれば直ちに系統的分類法が生ずるに拘らず、その一歩前に止つてしまつたのは、その本づく七略の分類の類と綱との關係が緊密でなく、容易に分離しうるような要素を含んでいるからであろう。王儉にとつては分類の系統化よりも單一化することが七略の主旨に合つすると考えたために、二種の分類表を合併するに至らなかつたものと思う。王儉の考えを繼承し、分類綱目の決定に功績のあつたものが梁の阮孝緒である。その目錄を「七錄」十二卷と名付け、武帝の普通年間に完成した。その綱目は

(1)經典錄　(2)記傳錄　(3)子兵錄　(4)文集錄　(5)技術錄　(6)佛法錄　(7)仙道錄

七錄を七志と比較してその綱目の異動を調べてみると、七志では歴史書が經典志の中に合併されていると共に、地理書が圖譜志として獨立部門を爲していたものを、七錄は歴史と地理を合併して記傳錄の一部門を立てた。又七志では軍書志と陰陽志とが二部門を爲していたものを、七錄は兩者を共に諸子類に合併して子兵錄に收めている。その他七志では佛道二書を附錄としたのであつたが、七錄は正規の分類に收めている。尤も七錄は一般の圖書を內篇と稱し、佛道二書を外篇と云つて區別している。かように七錄は同じく七分類と稱しながら、七志に較べて分類の綱目が減少している。佛道の二類を除くならば五分類になるわけであるが、この簡素化による分類の不備は、五類の下に第二次の細分類を設けることによつて補なわれている。その細分類は極めて詳細なもので、內篇の第一の經典錄は九綱、第二の記傳錄は十二綱、第三の子兵錄は十一綱、第四の文集錄は四綱、第五の技術錄は十綱に分かれ、又外篇の佛法錄は五綱、仙道錄は四綱に分かれ、合計五十五綱になる。分類の一綱目を新設することすら、仲々容易なことでないのに、五十以上の綱目を作り、且つそれを相互矛盾なく排列することは、餘程の學識がなければ出來ぬことである。傳記によると阮孝緒は十三歳で五經の大義に通じ、長ずるに及んで博く羣書を極め、且つ精力强記で學者の宗とする所となつた。度々朝廷の招聘を受けたが、これを斷つて研究に沒頭し、五十八歳で沒したと傳えられている。これ程の大學者であつたから、この分類の撰定が出來たのであろう。併し五十五綱のすべてが彼の發案になつたわけではない。七錄の序文に「今所撰七錄、斟酌王劉」とあるから、劉歆と王儉に本く所があつたものと思う。前述の如く七略及びそれを繼承した漢書の藝文志では「六略、三十八種」と云つているが、この三十八種とあるのが、七錄の細分錄に當るものである。王儉の七志にも同樣な細分類があつたものと思われるが、その綱目數は判らない。七錄はこの三十八種を五十五種に發展せしめたわけである。次に注意すべきことは、この第二次の細分類と第一次の七分類とが組合わされて、一つの分類系統を爲して來たことである。王儉の七志では四部分類と七分類とが合併せず、二種の目錄書と

なつて現われたのであつたが、阮孝緒の七錄では大分類と小分類とが併用され、系統的分類が漸く現われ始めたのである。後世の四部分類は大分類は四部であるのに對して、七錄は七分類である所に兩者の相違があるが、併し七錄の七分類を見ると、第一の經典錄は四部分類の經部に當り、第二の記傳錄は史部に當り、第三の子兵錄は子部に當り、第四の文集錄は集部に當るものであつて、殆んど四部分類の形體は備つていると云つてよい。ただ七錄では第五に技術類、第六に佛法錄、第七に仙道錄の三部門が四部分類に較べて多いのであるが、やがて子部の中に合併されてしもうのである。

七錄の次に現われ、且つ後世の目錄學に大きな影響を與えたものが隋書の經籍志である。隋代の著作は八九・六六六卷の莫大な數量に達し、これを整理して有用なもの六・五二〇部、五六・八八一卷の圖書を記錄したのが、この經籍志であつて、唐の長孫無忌等の編纂した隋書の中の一篇である。丁度、班固の藝文志が漢書の中の一篇であると同樣である。別錄七略以來、幾多の目錄書が亡んでしまつたが、これ等の目錄書が單行本であつたために、目錄學者以外には注意を拂うものが少ないからであると思う。これに對して、漢書の藝文志、隋書の經籍志は正史の中の一篇であつたために、現在まで殘つたのである。經籍志はその序文に「遠覽馬史班書、近觀王・阮志錄」とあるように、七志・七錄に本づく所が多い。その分類法について云えば四部分類を採用し、且つこれを經・史・子・集と名付けると共に、佛・道の二類はこれを附錄とした。經史子集の四部の名稱は經籍志に始まるものであるが、併しその實質は既に七錄に潛在していたもので、經籍志はこれを完成したものである。隋志が七錄を襲うたものであることは、四部の部門毎の細分類を調べてみるとよく判る。卽ち七錄の細分類は內篇では四十六綱を數えるのであるが、經籍志はこの綱目をそのまま採用している。この經籍志は七略・七志・七錄等の先人の業績を基礎として作られたものであるが、當時にあつて最も進んだ目錄書であることは勿論のこと、後世でもこれを根本的に改める必要を見ない程に優れた著作である。これ以後に現われた舊唐書の經籍志、新唐書の藝文志、宋史の藝文志、明史の藝文志、及び最後に出た四

庫全書總目提要などの官撰の目錄は、すべて經籍志を本として部分的の修正を試みたに過ぎない。歷代の藝文志で長く分類の位置の決まらなかつたものが佛・道の二書である。王儉の七志は佛・道を附錄とし、阮孝緒の七錄はこれを正規の分類に入れ、經籍志は再びこれを附錄とした。舊唐書は二書を目錄から省き、新唐書は子部の道家類に收め、明史は佛書の爲めに釋家類の一目を立て、この分類法は四庫全書總目の採るところとなつたので、ここに於て二書の分類位置が決定したわけである。隋書の經籍志は四部分類を確立したと云うものの、猶附錄として佛・道の二類を伴つているので、完全なる四部分類とは云えず、この二類を削除した舊唐書の經籍志に至つて名實備つた四部分類が現われるわけである。

唐の玄宗皇帝の開元年間に東都の宮中の集賢院の圖書は八九・〇〇〇卷に達し、これを四庫に分置した。經庫には一三・七五二卷、史庫には二六・八二〇卷、子庫には二一・五四八卷、集庫には一七・九六〇卷を數えるに至つた。唐以前の歷代宮中の藏書も分類に從つて書庫を異にしたかも知れぬ。隋の煬帝の大業元年には東都の觀文殿に東西兩屋を構え、東屋には經・史の書を、西屋には子・集の書を分置したと云われるが、未だ四庫に分けるまでに至つていない。然るに唐に至り四部分類が決定したので、それぞれの分類に從つて四庫に分けたのである。四部分類を四庫分類とも稱するようになつたのは、ここに由來がある。玄宗は東西兩都に四庫の書の正副兩書をおき、四庫ごとに「軸帶帙籤、皆異色以別之」（唐書藝文志卷一）とあり、色によつて四庫の書を區別した。

三

唐以後、分類の主流は四庫分類になるが、ただ宋代に至つて出版の事情が大きく變つて來た。唐以前の圖書は鈔本を主とした。從つて卷子本が多かつた。鈔本は製作に手數がかかり、費用も要することで、個人の藏書家というものは少なく、大部の藏書は天子の宮中に集まつた。從つて圖書の目錄は官撰が主であつた。然るに五代の馮道によつて

印刷本が始められ、そのため印刷による刊本が廣く流布するようになり、宋代には個人の藏書家も現われるようになつた。宋の晁公武の「郡齋讀書志」、尤袤の「遂初堂書目」や、續いて陳振孫の「直齋書錄解題」などの個人の撰述になる、官藏以外の圖書目錄が出るようになつた。時代が下つて元の馬端臨の「文獻通考經籍志」、明代の目錄たる清の黃虞稷の「千頃堂書目」などの目錄が現われるが、共に官撰の目錄に倣つて四庫分類を採用している。

個人の目錄が出ると、必しも官撰の分類規則に從わねばならぬこともない。官撰の目錄はややもすると前代の形式を踏襲する傾向になり易いが、個人のものであると獨自の分類法の出る可能性がある。既に北宋の仁宗の時に河南の李淑が「邯鄲書目」を作り、經史子集の四分類の外に「藝術志・道書志・書志・畫志」（郡齋讀書志卷九）の四類があり、通計八類になり、從つて八分類を採用したことになる。次いで南宋の初めに鄭樵が通志を作り、その中に「藝文略」の一篇を設けた。鄭樵は古來からの目錄書に載つている圖書を、存亡を問わず盡く集めて分類を加え、四庫分類によらず十二分類法によつた。更に第二次の細分類は一五五綱、この綱の下に二八四目を設けたのである。隋志の四類・四十綱。舊唐書の四類・四十二綱。新唐書の四類・四十四綱。そして最後に出た四庫全書總目でも四類・四十四綱の分類に比較しても、鄭樵の分類は非常に細分化されたものであることが判る。宋代になつて出版の事情がよくなつたと云うものの、その爲めに新しい種類の圖書が現われたわけでもないのに、鄭樵が斯樣に十二分類法をとるに至つたわけは何か。十二類を四庫の四類に比較すると、結局四庫の各類を細分したものであることが判る。即ち

經部　(1)經類　(2)禮類　(3)樂類　(4)小學類
史部　(5)史類
子部　(6)諸子類　(7)天文類　(8)五行類　(9)藝術類　(10)醫方類　(11)類書類
集部　(12)文類

大體から云えば經部を四分し、子部を六分したのである。ある意味では七略の六分類、七志・七錄の七分類に近いと

云える。大分類が十二類に增加すれば、その下の綱目も當然增加してくる。例えば「文類」の下には楚辭、別集、總集、詩總集、賦、贊頌……など二十二綱を區分している。綱の下には更に目を立てた。例えば經類の「易」の綱は古易、石經、章句、傳などの十六目を立てている。全體で十二類・一五五綱・二八四目になる。

鄭氏の目錄に載せた圖書は、現存すると否とを問わぬものであるから、その目錄は通例の目錄が藏書目錄であるのと趣きを異にする。鄭氏はその校讐略の中に「學問が專門的にならないのは、書物が明かでないからであり、書物の明かでないのは、分類が正確でないからである。專門の書があれば、專門の學があり、專門の學があれば、世々守る人が生ずる。人がその學を守り、學が其書を守り、書がその分類を守れば、人に存沒があつても、學問は息まず、世に變故があつても書は亡びない。……書物の亡びるのは、分類の法が正しくないからである。」と云つているが、これによると鄭氏の圖書の分類は實は學術の分類を意味する。圖書の分類が正確でないと專門學が亡び、引いては學問全體が衰微するということになると、圖書の分類はいくら細かくとも、過ぎると云うことはない。これが鄭氏の分類法が生じてきた理由である。一體出版物によつて、その時代の學術界の大勢を概觀しようとし、圖書目錄を利用したものが正史の藝文志である。漢書の藝文志を初めとして、歷代の正史に藝文志又は經籍志の一篇を設けてあるのは、單なる藏書目錄のためだけでなく、その時代の學術の歷史を示そうという目的を持つものである。鄭氏の「藝文略」はこの考えを繼ぐとともに、一代だけでなく、古代から宋代に至るまでの學術史を編纂しようとしたものでないかと思う。目錄の編成はややもすると技術的に處理され易く、これを學問的に研究するものは少ないのであるが、鄭氏はその數少い目錄學者の中で最も優れた學者である。されば清の章學誠は、鄭樵は劉向以來の第一人者であると賞めている（校讎通義序）。

鄭樵によつて四庫分類以外の分類法が創設されると、この考えに影響されて、獨自の分類法に本いた藏書目錄が現われるようになつたのが明代の大勢である。明の英宗の正統六年（A. D. 1441）官撰の「文淵閣書目」は十七分類をと

り、その他十四類、十八類の目錄が現われた。この風は清初まで續き、順治年間の錢曾の「讀書敏求記」は四十四類、康熙中の王聞遠の「孝慈堂書目」は八十五類に分けている。これ等の目錄は分類が詳しくなつているように見えるが、實は第一次分類と第二次分類を合併したものが多いのであつて、系統的という點から云えば、四庫分類に較べて一歩退いたものと思う。

明代では官撰の目錄は四庫分類を、個人の目錄は獨自の分類を採用し、二種の分類法が併び行われたのであつたが、この狀勢も「四庫全書總目提要」の出現に及んで、分類法は四庫分類に統一されるに至つた。四庫全書の編纂は乾隆三十八年に始まり、四十七年（A. D. 1772）に至つて一應完成した。一書の整理が終るごとに、その書の來歴や批評を要約した提要を卷頭に加え、後にこれを集めて單行したのが「四庫全書總目提要」二〇〇卷である。十年の歳月と數百人に上る一流の學者を集めて編纂したものだけに、總目提要は目錄として比較するもののない程立派なものである。提要の採用した分類法は云うまでもなく四庫分類法であり、この大分類の下には四十四綱の細分類が設けてある。七錄の四十六綱、隋志の四十綱、に較べて綱目の增加は多くないのであるが、併しこの綱の下に、必要な箇所には更らに詳しい目の分類が施されている。類、綱、目の三段の分類は頗る系統的である。四庫提要はかような特長を持つというものの、從來の目錄に較べて特別な創見があるわけではない。一體四庫全書が、その分類法を決定するに當り、編纂委員の間に討議のあつた樣子がないが、これは四庫分類を採用することが、乾隆帝の最初からの意志であつたからである。皇帝は四庫分類が最も古い歴史を持ち、從つて最も安全な分類法であると考えたからであろう。それと共に乾隆帝は、目錄が學術の概觀に役立つだけでなく、藏書の檢索用のためのものである事を考えていた。卽ち提要は大部で、檢索には不便であると云つて、別に「簡明書目」を作らせたのである。乾隆帝は四庫全書を七部作り、河北に四部、江南に三部を分置した。

(1)文淵閣（北京、宮城）　(2)文源閣（郊外圓明園）　(3)文溯閣（奉天）(4)文津閣（熱河）

(1)文匯閣（揚州、大觀堂）　(2)文宗閣（鎮江、金山寺）(3)文瀾閣（杭州、聖因寺）

江南地方に三閣をおいたのは、當時學問の盛んな江蘇・浙江地方の學者に開放し、自由に利用させようという爲めである。これは圖書館の性格を持つもので、歴史上嘗つて無かつた新しい試みである。先の簡明書目の編纂も、この圖書館の檢索に役立たせようとの動機から出たのではないかと思う。これが亦四庫分類法を採用した一因である。四庫全書總目提要は國家制定の目錄であり、その內容も四庫分類としては完全に近いものであつたから、淸一代の分類法はここに定つたと云つてよい。

ただ四庫提要の出現後、四庫分類に對して一つの變更が加えられた。卽ち經・史・子・集の四部の外に叢書部が加えられ、五部の分類になつたことである。明の中期以後から叢書が出版されるようになり、淸朝に入つてからは此の傾向は一層增加するに至つた。叢書は四部の各部の書を含むものであつて、四部のいずれにも所屬しない。叢書に類似して四部に亘るものに類書があり、その起源は古く、隋書の經籍志はこれを子部の雜家類の中に入れている。雜家とは專門學の名付くべきものがないのでこの名を得たのであるが、類書はこの雜家に類するからであろう。新唐書の藝文志では、雜家類から獨立して類書類の一目を立てることになつたのであるが、これは當時「藝文類聚」「北堂書鈔」「白氏六帖」などの大部の類書が續々現われ、雜家に附屬さすことが不適當と考えたからであろう。叢書が多く現われた明代では、明史の藝文志は叢書をこの類書類に入れた。叢書と類書とは四部に亘る點は同じいが、前者が獨立の單行書を集めたのに對して、後者は事項を集めて類別した百科全書や字典に近く、內容を異にするものであるから、これを一類に分類することは正しくない。そのため旣に明末に於て叢書の獨立部門を立てた目錄書もあつた（祁承㸁、澹生堂書目）。が一般に承認されるに至らず、四庫提要も叢書を內容によつて分類し、ただ叢書名を雜家類の雜編の目に止めるに過ぎない（四庫提要雜家類七）。然るに淸の中期以後から夥しい叢書が出版されたので、光緒元年（A.D. 1875）に張之洞は「書目答問」を著わし、四部分類の次に叢書類を置くことにした。彼は「勢難隸于四部、故別爲

類」と云つて、叢書部と呼ばなかつたことから考えると、五部の分類法を立てようとするのでなく、四部に附錄する一類としたように思う。これは清朝の高官たる張氏が國定の分類法に違反してはならぬことと、四部の次に叢書部を置くことは、出版の前後による便宜的な處置であつて、目錄學上意義の少ないものであることを知つたからと思う。併しながら實用的には五部分類は便利である所から、張氏以後はこの五部分類が廣く行われるようになつた。

四庫分類法の完成には上述の如き長年月を要し、それだけ中國圖書に對しては最も適當した分類規則ではあつたが、この分類法も清朝の滅亡と共に、その役割りを果し終つたようである。中華民國が誕生し、歐米の學問思想が入り、そのため中國固有の分類法では處理し難い著述が增加して來たからである。新しい出版物の分類整理については、從來の四庫分類法を修正することも可能であるが、圖書の種類及び利用方法の全く一變した現在では、寧ろ別箇の分類法を採用することが效果的である。されば特別な圖書館設備以外では、四庫分類法は餘り行われていないのが現在の大勢である。